乗り放題きっぷの未来

函館市医師会
函館市医師会健診検査センター
水関（みずせき）　清（きよし）

乗り放題きっぷと呼ばれる乗車券がある。きっぷの有効期限内なら、きっぷのカバーする区域内で、行き先も、そこに至る旅程も自由に決められる。しかも、複数の区域を訪れることは決まっているが、その順番が未定であっても対応は可能で、その場合には、それぞれの区域内での動き方をまず決めておいて、細かな予定が定まった後にゆっくりと訪問順を確定することも容易になるからである。

国鉄時代からJR移行期の早期には、最大20日間有効な「ワイド周遊券」と、おおよそ１週間有効な「ミニ周遊券」が販売されており、思い立ったら出発当日でも購入可能という優れた利便性も兼ね備えていた。全国各地の観光地が自由周遊区間（≒目的地）として設定され、そのエリア内の国鉄・JR線及びバスは乗り放題で、出発地から自由周遊区間までは急行列車に乗車可能なＡ券と、乗り放題の自由周遊区間は特急にも乗れるＢ券からなる２枚つづりで、Ｂ券は急行列車に乗車可能な帰りの乗車券も兼ねていた。廃止直前の1998（平成10）年時点で、北海道・道南・東北・南東北・信州・南近畿・北近畿・山陰・四国・九州・北九州という11種類のワイド周遊券が販売されていた。

自らをふり返っても、定期試験の合否次第で、休みになるか流動的だった再試験期間など、休めるかどうかが直前まで判明しない休暇期間が随所に設けられていた大学時代には、これらのきっぷにはお世話になった。大まかな行き先以外は万事未定でも、駅で周遊券を購入し、そこに至る急行列車の車内で旅行ガイドを拾い読みしながら仮眠をとり、気に入った駅で下車する、というスタイルの旅行が可能であった。当時は夜行急行も数多く運行されており、体力に自信があれば、連日夜行で周遊区間を回り尽くす、という猛者も少なくはなかった。

このような汎用性と利便性は現在ではほぼ失われたが、JR四国で販売されている「四国グリーン紀行」を利用すると、その残り香を味わえる旅が現在でも可能である。ちょうど2025年３月末に四国での用務が生じたため、この乗車券を利用する機会に恵まれた。ワイド周遊券時代のような夜行急行はなく、無理は禁物な年代になったため、まずは先方の希望を優先して用務の日程をかため、つぎに乗車可能な時間帯に運行されるイベント列車の指定席を確保するという手順で旅程を組み立てていった。

「グリーン紀行」と名乗る以上、グリーン車の利用が可能で、しかも回数の制限はない、というありがたいきっぷであるが、グリーン車の連結がない区間は特急普通車指定席の利用となり、特急列車の運行がない場合には、普通車自由席に乗るというルールである。

ここからが、時刻表をにらみながらの時間になる。漠然と探しても不完全燃焼な計画になるという経験則に従って、①イベント列車→新型車両→新塗色車両の順に絞り込む一方で、並行して、②車両タイプにかかわらず車窓風景の優れた区間を走る車両を選定する、という手順で乗車可能な車両を選んだ。

JR四国では、キハ185系の内装を変更して、凝ったグリーン車仕様とした「ものがたり列車」と呼ばれるイベント列車が、須崎周辺（志国土佐　時代（トキ）の夜明けのものがたり）と大歩危周辺（四国まんなか千年ものがたり）の土讃線区間、そして伊予大洲周辺（伊予灘ものがたり）の予讃線区間に運行されており、３月末までは「グリーン紀行」きっぷでも乗車可能という特典が付与されていたので、迷わず指定券の入手を試みたが困難で、一部列車の予約にとどまった。当日は余得のような、窪川駅からの乗車だったが、定期の特急列車なら１時間余の区間を、２時間半かけて移動するので、随所に観光の要素が散りばめられていた。ある小駅では、列車交換（すれ違い）時間を利用しての記念撮影に客室乗務員がすかさず駆け付け、乗降ホームには物販業者が並び、別の主要駅では大漁旗を振ってよさこい踊りが披露され、高知の近郊区間内の駅では短い停車時間を利用して入れたての珈琲が振る舞われる、という離れ業のようなおもてなしが連続する中を、列車は高知駅にすべり込んだ。

ここまでのゆったりした時間からは一変して、わずか４分の乗り換え時間で、2019年にデビューした2700系気動車に乗り継ぐ。日本の伝統意匠を配した“Neo Japonisme”（JR四国Homepageより）の思想のもとで設計された車内は快適で、ひと眠りすると列車は瀬戸大橋に乗り入れていた。「全国でここだけ」という鉄道道路併用橋から見下ろす瀬戸内海は、いつ見ても新鮮で、大きな貨物船が橋の下を横切っていく。スピードを落として停車したのは、JR四国とJR西日本の境界駅である児島駅。行政区域としては倉敷市に属する街であるが、乗り換えで昇り降りした階段は一面のジーンズ塗色で、駅から15分のところに、ジーンズストリートと称する名店街があるという。

児島駅から四国への折り返しには、5000系のマリンライナー号を利用した。先頭のグリーン車は二階建てで前面展望が素晴らしい。視点が高く、かつ左右にひろがる形状のために、橋の構造がよく見えることに加えて、船が橋の下をくぐって航行する様子までをしっかりと追うこともできる。

今夜の宿は高松市。明朝に設定した用務が順調に終われば、再びマリンライナー号で瀬戸大橋を渡って児島駅で折り返し、瀬戸大橋アンパンマントロッコ号に乗ろうと思う。この車両の床には、海面をまっすぐ上から眺めることができる大きなガラス板が嵌め込まれており、ちびっこたちの歓声に混じって、そっとその絶景を眺めるつもりである。